

本と社会



●発行元 人文ネットワーク ●印刷 神谷印刷(株) ●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住) 〒169-0051 新宿区西早稲田3-16-28 Tel.03-3202-7391 Fax.03-3202-5832 ✉ jinbun-net@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々と連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性のみに偏する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニュースレターはこうした私たちの活動の一部を紹介させて頂くものです。

巻頭インタビュー

大野英士氏に聞く：『ユイスマンスとオカルティズム』出版への道

聞き手: 入江公康

世紀末文学が幻視する資本主義の黄昏

私が19世紀末の文学機械ユイスマンスの欲望をよみがえらせた理由



おおの ひでし 1956年東京生まれ。東大文学部仏文科卒、早大大学院文学研究科仏文学専攻博士後期課程満期退学。1993-2000年、パリ第7大学大学院でJ.クリステヴァに師事。現在、早稲田大学ほか非常勤講師。主著『ネオリベ現代生活批判序説』(白石嘉治との共編、新評論、2005/増補2008)、共訳書F.X.ヴェルシャウ『フランソワリック』(緑風出版、2003)。

- このたび上梓された『ユイスマンスとオカルティズム』には、作家ユイスマンスについての詳細な読解が盛り込まれています。この作家に30年こたわり続けた動機についておきかせ下さい。

中学時代からの三島や澁澤の影響と、高校時代から関心を抱いた中世キリスト教世界とが交わる地点でユイスマンスを見出し、卒論のテーマにしました。だがこれほど引きずったのは、ユイスマンス文学の核心部分に西欧カトリシズムの負の焦点たる「否定性」の問題があることに気づき、それを乗り越えねば前進しない状況に追い込まれたからです。そしてそれを焙り出すのに精神分析や生成批評という「手法」が必然的に要請された。結果的にはこれ以外の分析手法はあり得なかった。

- 美学について。19世紀末フランスの同時代作家達の中でユイスマンスの独自性、こういってよければその革命性とは何でしょう？

近代すなわち「神の死」に由来する「意味の根拠の喪失」は、同時代のあらゆる人間が直面した精神的危機です。フローベールやマラルメなどはその点でより自覚的だった。ただ、ユイスマンスの特権性は、彼が自己の欲望の

論理に徹底して忠実であり、明示的にせよ、より隠された形にせよ、その運動を自身のエクリチュールの中にはっきり刻み込んでいるところにある。フロイトやシュルレアリスト、バタイユ、セリーヌらに引き継がれるこの問題圏を、19世紀末の時点ですでにはっきり顕在化させていたことです。

- 本書の「神の死＝ニヒリズム」が世紀末を規定しているというテーゼが、現代においても積極的な意味とは？

我々人間は地球という生態系が成立しゆく時点で、様々な偶然の戯れによって偶々生まれた狂った種なのかも知れません。けれどいずれにしても我々は「意識」を持ってしまったのだから、自分たちの存在の根拠や意味を求めざるを得ない。19世紀はそんな「意味の根拠の喪失」をオカルティズムで埋めようとした時代でした。いや、現在もなお我々はオカルティズムに囚われているといっている。超越と内在の問題を、オカルティズムを媒介せずに解きうるか。ユイスマンスが突きつける「問題」があるとしたら、突き詰めればそこです。

- さらに本書には「欲望」という言葉が登場します。この「欲望」を捕捉しつつユイスマンスを読むことは、どのような地平を拓くのでしょうか？

欲望とはある意味で「権力」との相関で決まる運動。だからつねに「言説」とのかかわりの中で問題にせねばならない。「客観性」という権力装置になり果てた「実証主義」的病理学から、精神分析という、「言説」をマテリアルとした思想圏が分離せざるを得なかった動因もここにある。ユイスマンスのテキスト読解

はこの意味で、ブルトンというところの「機械的なもの」や「エクリチュール」の「目覚め」が必然か否かという問いをアポリアとして我々に突きつけるのです。脳科学のレベルで人間の意識が「説明」可能になったとて、それは欲望と権力の弁証法の解明に何も役立たないという意味で。

- さいごに、人文的営為を蔑ろにするこの趨勢のなかで、文学研究は時代批判とどう関わるのでしょうか？

慢性的な「利潤率の傾向的低下」(白石嘉治『不純なる教養』青土社、2010)という資本主義の根本矛盾を糊塗する手段として新自由主義が登場した。そこでは単に「生き残る」だけでなく「人間らしく生きる」ことを可能にする人文的教養に集中攻撃がかけられ、それは日本でさらに露骨な形をとった。だがいまや「生き残り」に動員されている人々ですら、そんな生き方に辟易しているのが現実ではないか。目先の利益を考えずテキストを読む喜びと欲望を手放さない覚悟こそ学問本来の姿ですし、そうした文学の意味に共感してくれる読者がいるのだと確信しています。



A5判616頁
税込5985円
新評論刊

「本書は、澁澤龍彦、三島由紀夫といった優れた読み手に愛されながら、日本の読書界の片隅で依然迷い込んだ横光を発し続ける特異な小説家、J・K・ユイスマンスの作品と人生に正面から向き合いあらゆる資料と参照軸を駆使してその実像に迫ろうとする渾身の試みである。しかもその試みは、科学と合理主義の時代でありつつ非合理的な神秘思想が跋扈するフランス19世紀の全体を視野に収めた壮大な斜視を備えている。」(星望守之氏による帯推薦文より)



ジョリス＝カルル・ユイスマンス(Joris-Karl Huysmans 1848-1907) 19世紀末フランスの作家。ゾラの薫陶を受け自然主義作家として出発したが、『さかしま』(1884)によってデカダンス・象徴派の美学を先導、オカルティズムに沈没。その後の作品『仮白』(1886)などはブルトンらシュルレアリストを熱狂させる。しかしその「革命性」は、1892～93年にかけての作家の唐突な「回心」と作風の極端な神秘主義化によって攪乱される。日本では1960～70年代、田辺貞之助、澁澤龍彦、出口裕一郎により翻訳紹介され、三島由紀夫、横光謙二郎らの支持を得たが、この異色の作家の創作の本質や主題の今日性は十分に理解されてきたとは言えない。おそらくその最大の障壁は、彼の文学がわれわれに疎遠なカトリック文化に浸っていることにあった。本書は、そうしたある種の問題回避がこの作家の文学を歴史的・宗教的・思想的文脈から切り離し、病的で甘美な幻想＝意匠としての耽美主義に封じ込めてしまうことになった文学史上の「誤解」を批判的に乗り越えようとする試みでもある。

『ユイスマンスとオカルティズム』の
主題、手法、今日性をめぐって

2010年5月29日、新大久保・早稲田大学医食文化研究所にて第84回例会が開催され、当会メンバー7名のほか松本久男氏（大東文化大2年）が参集。著者大野氏による報告を受けて、ユイスマンスの作品世界、オカルティズム、人文書の手法などの問題群をめぐって活発な議論がおこなわれた。以下はその要旨の抜粋である。（編集＝入江）

・・・・・・・・・・・・・・・・

大野 仏語の博士論文等を土台とした一般読者向けの改稿は大変でした。2007年＝「没後100年」までの出版をめざしたが、結局脱稿が08年10月。本文1100枚にもなりました。

本書では、18世紀末の大革命＝神の抹消というエピステーメーの、次世紀末における転換＝治癒という仮説を提示しています。ユイスマンスも意味の抹消という状況に耐えられず「神」をつくる。だがこの作家が特異なのはエクリチュールのいたるところに19世紀末の認識論的変動の痕跡が見える形で残っていること。それを生成批評という手法で析出した。ユイスマンスの欲望の運動は神をつくりあげ、同時にその神を抹消していくようなダイナミックな機制をもちます。それを整理して提示できたのではないか。「なぜこの人はこんな変な世界をもっているのか」という問いへの答えです。それから今回、神秘主義やオカルティズムをこの作家の中に凝縮されているものとして追求した。と同時にその過程で大革命を経た右派のイデオロギー形成・心情形成といったものもテーマとして浮かびあがった。

言いたいことはとりあえず全部言ったし、提示したい流れは出せた。論じているのはいわ

『スヒーダムの聖女リドヴィナ』（邦題『竊癖の華』）——贖罪の犠牲となる聖女は、自ら率先して世界のあらゆる罪を自分の身体に受け入れ、欲動を孕む物質的な基体である「流体」原理に基づく錬金術的かつ算術的な過程によって、これらを苦痛へと変換する。……「身代わりの秘儀」における苦痛の掛け金は、自らの身体に世界のあらゆるおぞましさを引き受けつつ、自らを守る皮膚すらも失い、自己同一性、身体固有性を保つ境界を越境することによって、死の欲動の支配する否定性の圏域へと再び侵入することになるのだ。（本書p.478）

ば「悪le mal」の問題です。「悪」のひとつの現れ方が、オカルティズムや死者崇拜となるんですが、神という超越的審級がなくなったあと、その代替機構として死者崇拜なりが勃興する。たとえば聖母マリアの出現といったところで、その「実在」はだれも証明できないんですよ。

19世紀とエピステーメーの転換

土屋 読んで最初に感じたのは圧倒的なエネルギー。作品を取り巻く時代精神を「マリア信仰」という視点から論じ、その空間に「閉鎖空間」「食物」「皮膚」といった作品内部を貫くテーマティックを重ね合わせます。二つの絵図を重ね合わせると見えてくるのが「オカルト」世界という仕掛けですね。核心は、作者の外と内とを結ぶ通底器である作品に仕掛けられた駆動装置を、心的プロセスそして作品として物質化するプロセスの両面から解き明かそうとする苦闘にあると思います。

出口 19世紀末のエピステーメー転換という仮説に興味を抱いた。南仏ラングドック地方の村々で、動物をコミュニティ・シンボルとする祭を調査しているが、19～20世紀にかけてその動物選択に変化が起きている。この時期に人々の神話的思考に何らかの変化があったのでは、という仮説を私も持っています。

ところで、大野さんが指摘するエピステーメー転換が、時期的に第三共和政が本格始動する1880年代と重なっていたことは興味深い。その結果、公的領域における政教分離は加速したが、一方、私的領域における脱宗教性

（ライシテ）の進行と、カトリック回帰やオカルティズムへの熱狂がどのように交差していたのか気になる。また、聖母の出現は、必ずしもオカルティズムに直結しないのでは。土俗的な大地母神信仰に由来するマリア信仰は、キリスト教よりも長い歴史をもつ。カトリックはそうした民間信仰を巧みに取り入れたが、19世紀、科学主義も席卷しカトリック秩序が危機に瀕した時代に、「霊性の居場所」としてマリア信仰が人々に召喚されたとも解釈できるからです。

主題化される「オカルティズム」

蔵持 2001年に初めて会った時、ユイスマンスをやっていると聞いて「変わった人がいるな」と思った。年寄りの役目としていうけど、ユイスマンスの翻訳書はゾッキ本だった。60～70年代、桃源社の邦訳版が古本屋の店先に積まれていたのを買ったものです。そうした作家をとりあげる人がいると知って驚いたのだけど、しみじみ時代が変わったと思う。

いうまでもないけど、とにかく大変な力作です。素晴らしい本だし、久しぶりに楽しい本だった。文章も緻密に練られていてレトリックも素晴らしい。世界的にみても非常に水準の高い書物ではないか。というのもユイスマンスの作品を通して様々なもの（オカルティズム等々）を見ていき、ユイスマンスを自分のものにしつつ、そこからさらにオカルティズムを抽出していくという試みが興味深い。澁澤にぜひ読ませたかった。私はむしろオカルティズムに重きをおいて読んだ。本書とは違う形で考えているかもしれないが、オカルティズムは極めて興味深い問題なんですね。

ナニボウ 場所を移すことで何かに決着がつく状況がないと思えるとき、どうやったら己の精神を十分に集中させられるのかを問題にすることで、再度はじめられることがあるのですが、「閉鎖された空間」の件は、ユイスマンスのやり方が検討されていておもしろい。

入江 日本に強力なリアリズム文学が生まれなかったひとつの理由といったものを感じつつ読んだ。モダニズムは先鋭的に存在したが、リアリズムが弱いんじゃないかという思いがある。本書も最後に触れていますが、世紀末文学と開国期のそういう同時代状況を感じざるをえなかった。本書はそうした思考を賦活し拡げてくれます。それともうひとつ、「憂鬱 spleen の逃げ道」ということ。1848年に生まれて第二帝政期に幼少・青春期を送った人間の憂鬱。その逃げ道のあり方のひとつとしてユイスマンスも読める。西欧世紀末は帝国主義絶頂の時代ですが、今後の仕事として帝国主義と「植民地」、つまり「外部」の問題がどう出てくる

国家・民衆・教会

≡ 出口雅敏（東京学芸大学教員／文化人類学）

宗教学者、関一敏は『聖母の出現』（日本エディタースクール出版部、1993）で、19世紀フランスにおける聖母出現の宗教的意味を解説している。聖母マリアは主として子供たちの前に現れ、民衆や教会に預言を授ける。多くの場合それは自然現象の異変や病治しの奇蹟をともしない、その地に人々の信仰を集め、礼拝堂の建立をへて聖地巡礼へと展開した。ところで、この現象に含まれる諸要素——聖母・出現・神秘体験・子供・泉・病治し・奇蹟・預言・巡礼——は、中世の羊飼い伝説群にも符合し、それはフォーク・カトリシズムと把握できる。だが19世紀の民衆世界には、聖母信仰やイエスの聖心（サクレ・クール）信仰と同時に、脱宗教性（ライシテ）的傾向（不信仰や反教会）も併存していた。それゆえ教会権力は、出現・奇蹟・列聖の許可を通じて民衆活力の吸収・排除・制御を試みていた。関はそのもつれを、聖母出現の発生論的過程、すなわち見者と周囲の民衆・教会の反応過程（共感や懐疑）の考察を通じて解きほぐし、一つの宗教表象がいかに集団的共同性を獲得（または獲得に失敗）するかを明らかにする。聖母出現はオカルトではない。それは19世紀、国家と教会の間で翻弄される民衆が、貧者・無学者・子供を「見者」とし、その周囲に「群れ」ることで、霊性に対する己の権原を示した出来事ではなかったか。

オカルティストは夜の歌をうたう

≡ 白石嘉治（上智大学他教員／文学）

ピエール・クラストル『国家に抗する社会』（渡辺公三訳、水声社、1989）を20年ぶりに再読する。インディオたちは文明＝国家的な組織を知らないのではない。その統合から離脱しつつ対抗的な社会をつくりあげていた——このそれ自体画期的なテーゼしか以前は読みとれなかったが、クラストルはもっとふみこんでいた。インディオたちは夜ごと孤独にみずからを讀める歌をうたい、その反社会的な言葉には世界そのものがやどる、と。

19世紀末のサンボリストはアナキストと共振をふかめていた。後者の直接行動にもかかわらずではなく、むしろそれゆえにであるという（Uri Eisenzweig, *Fictions de l'anarchisme*, Christian Bourgois, 2001）。この結節において「知識人」が出現し、ゼネストの夢がつむがれる。タルドやベルグソンの周辺にどのようなひとびとが集っていたかを想い起こそう。権力には不可視の脈動が波うつそこに、インディオたちと同じ夜の歌が鳴り響いていたのであり、ユイスマンスのオカルティズムもそこにねざす。その能力はやがて群衆となり、日本でも日比谷焼き討ちの蜂起とともに新しい世紀がはじまるのである。



読書会の模様 (2010.5.29)

のかといった辺りもぜひ期待したい。

松本 開国、そして西洋をお手本とした文明開化の大混乱がのちの日本の歪んだ進み行きのもとになった、ということをはかて読みましたが、そのときのヨーロッパ文化が非理性的なオカルティズムに浸かっていたことに衝撃を受けました。

神の死の跡／後から

土屋 基本的な立論が太いわけだから「時代」を掘り下げるにあたって、たとえばグノーシスやカタリ派等々、いくらでもなぞることができる。19世紀は人口の急増期で、都市がはじめて都市らしい形をとった時代でしょう。ボードレーの言葉ひと言でいえば「都会の孤独」が誕生して、ひとつの肉体の皮膚の内側に閉じこもっている人間をこえて、『さかしま』の世界の自己、あるいはフローベールのように意識を解体してしまうような自己といった問題が立ちあがる。19世紀は時代を画すエビステマーとしてのイデオロギーでも裁断できるし、それを支えていた社会基盤を掘り下げて切ることにも可能な時代だ。大野さんの蓄積したデータ自体を軸脈にもっと展開できる。

白石 1885～87年という時期は、文学史だけでなく思想史、哲学史において「エビステマー

一転換」としての書物の出現があります。たとえばフロイトも同じ時期に、非常に奇妙な、「言葉」だけを手がかりにした手法をとり始める。本書では「流体論と生気論」。前者は信念や感情の流れが物質性をもつという見方、後者はそれらの流れをあくまで非物質的なものとして捉える見方。同時期に社会学ではタルド、文芸批評ではフェリクス・フェネオンが出る。これらの人々の互いの関係を考えられるような仮説をユイスマンスというテキストに固着しつつ練りあげた。

現象として、レファランスをもたない群衆が19世紀になって登場する。そこにスプリーンという形でメランコリックを抱えたボードレーがいた。都市に出現した群衆をどうやってそのまま捉えるか。この問題は今も続く。

大野さんが50年かけて、濫渾的なものから遠く離れていってしまったのだな、ということを感じる。「エビステマー転換」という仮説を据えることで、精神分析そのものが出てくる時代を捉え直し、19～20世紀に方法として君臨してきた精神分析をもういちど作品に埋めこむ。それがこの書物にこめられた意志であり「文学への覚悟」なのだと思う。

大野 曖昧なものにひとつの形を与えていく、それは濃なのか結晶なのかかわからないが、その形が見えてきて、それによって世界が少しでも透明化する。そんな機制があるのだ、ということを感じた。その繰り返しのなかでしか、言葉も文学も流れていかない、という気がしています。『

マラルメと ユイスマンス

Mallarmé et Huysmans

岡山 茂 (早稲田大学教員／文学)



パリにエッフェル塔が立ち上がった頃、ヴィリエ・ド・リラダンがユイスマンスが紹介したその近くの教会施療院で死の床に伏せていた。マラルメにとってヴィリエは、ランボーと同様、地方からの〈到来〉によってパリの詩人たちを驚かせた特異な存在である。ランボーはさらにヨーロッパからの〈出奔〉によっても驚かすが、ヴィリエはパリに留まりながら、「産業、進歩、科学、呼び名はどうであれ、近代のあらゆる思いあがりに対して、死に物狂いの戦い」(マラルメ)を演じることで彼らを驚かせ続けた。戦いに力尽きて斃れたヴィリエとその家族を助けるために、パリ生まれのユイスマンスとマラルメはあらゆる努力を惜しまなかった。

このブルターニュの古い貴族の末裔は、中世以来のイマジネールな知をパリに蘇らせたのである。マラルメは「魔術」のなかでユイスマンスの『彼方』に触れながら、「空疎で、混迷していて、捉え難い近代」よりも、「孵化の時代」としての中世の方が本質的であると述べている。しかし19世紀末は、18世紀に生まれた啓蒙思想やドイツ観念論のような、科学を正当化するための「メタ物語」が崩れる時代でもあった。悪魔主義に溺れるオカルティスト、テロリズムに走るアナキスト、自由詩を書き始めるサンボリスト、真理のみを求める科学者、正義のみを語る政治家から離れて、真の〈知識人〉でありうるためには、イマジネールな知あるいは文学への「信」が必要であった。

オカルティズムが鏡のなかの闇へと人を誘うのに対して、文学は闇のインクによるエクリチュールで作品という象徴的な鏡をつくる。その鏡のなかへは誰もが、あたかも本の頁を開くように(「ガラス板」を壊すことなく)入り込むことができる。こうして中世以来の文学の伝統は、19世紀末に、近代の啓蒙思想やドイツ観念論に代わって「メタ物語」となったのである。

異なる「言語ゲーム」に属する真理と正義を、同じ一つの〈展望〉のもとで追求するのが〈西洋文明〉なら(リオタール)、それは「まやかし」(「科学を基礎づけたプラトンの哲学そのものは科学的ではない」)であるとともに、「神秘」である(科学や民主主義や人権の概念はそこからしか生まれえない)。マラルメ、ユイスマンス、そしてグラのような「ミスティック」は、〈文明〉が崩壊しようとするさなか、「神秘」の可能性に賭けることでそれを崩壊から救った。大野英士の『ユイスマンスとオカルティズム』は、そのような〈展望〉をようやく東洋に在るわれわれにも拓いてくれたという意味で、画期的である。

『神秘』を縁取る

片桐 祐 (青山学院大学他教員／文学)

いわゆるリアリズム作家の代表格に目されるバルザックにも、神秘主義的傾向の登場人物は相当いる。それらの描き方は区々あって当然だが、そのなかで、なるほどバルザックらしいと思える例は、『村の司祭』の女主人公ヴェロニックのそれだ。

ある殺人事件の犯人として断頭台に送られた愛人亡きあと、贖罪に半生をついやす女の物語である(明示されないが、おそらく共犯者は彼女自身)。

作者の筆は、直接的に、彼女の内面に触れることはない。思わず見やる木立などが描かれるばかり。だがたとえば、ドーナツのまん中の部分を神秘主義に彩られた心だとすると、その部分を直接名指す言葉がなくとも、ドーナツの輪の部分を言葉で埋めることによって中心部を浮かび上がらせることができる。いや、できるという以上に、中心の心を理知で解するのではなく、それを「感じとる」ためには、この手段がもっとも有効だといえまいか。

かくて、リアリズムと称される丹念な描写をもって、ヴェロニックの内面の神秘が縁取られる。縁取りの濃さと中心部の鮮明度は比例するから、ここでの神秘とリアリズムは相補関係にある。バルザックらしい。

『神の死』の多義性の秩序づけ

桑田 禮彰 (駒澤大学教員／現代思想)

19世紀末はヨーロッパの病いの重篤さが顕在化した時代である。この病いは「退廃(デカダンス)」「虚無(ニヒリズム)」などと呼ばれるが、ヨーロッパ文明の精神的基盤までも蝕むような病いの深さは、ニーチェによって「神は死んだ」という言葉で端的に——ただし謎めいた仕方で——表現された。

この「神の死」という概念は、病いの根源的解明とその克服の可能性を開くかもしれない。しかしそのためには、まずこの概念の多義性が秩序づけられなければならない。本書は、ユイスマンスを通して、その秩序づけの作業を行なっている、と私は読む。

「死んだ神」とは、歴史的には処刑されたルイ16世という「王」であり、精神分析的には各人の「父」であり、形而上学的には厳密な意味での内面的超越としての「イエス・キリスト」である。

本書は「王殺し＝父殺し＝神殺し」という等式を提示し、1世紀前のフランス革命におけるルイ16世殺害がフランス人の心に刻み付けたオイディプス的罪悪感の問題を、あくまでも形而上学的レベルの上に秩序づける。王と父がイエス・キリストに等置・類比され、後者を媒介にして後者の背後の超越神と結びつけられてはじめて、当該の問題は単純な政治イデオロギーのレベルから抜け出せたのである。

ひび割れた鏡

ユイスマンス読解からみえてくる「私」と時代精神

● 土屋 進 (中央大学他教員／現代思想)

ユイスマンスという作家の内面宇宙を通して 19 世紀という時代精神に正面から切り込む本書は、「オカルト」という社会的無意識空間と「身体性」をめぐる個人の空間がいかに錯綜しながら時代を作っていたかを明らかにする。

「いかに自然の事物に似せて作るか」から「事物の間に存在する関係」を物質化する「世界へと転換を図る近代の完成期に、民衆の中では「異端マリア信仰」という自然発生的な認知図が生まれていた。それまでは「自然の中に存在する」ことが確かなものと思っていたロマン主義的な魂が、「自然の事物から自立して存在する世界」を作りだす近代科学によって中空に放り出されてしまったのだ。

一方でこの時代に作りだされた人工都市は「新たな孤独」を生みだす。ボードレールの「パリの憂鬱」は、共同体の強い磁場が働く空間では生まれなかった人中にいて生まれる孤独だった。個人を取り巻く生活空間が再編成されるこの時代、「私」という個体の輪郭を作る皮膚は侵され、「私」という自我の再構成が促される。スタンダールが自我による「世界私有」を志す一方で、フローベールは自由間接話法を駆使して自我の解体に向い、マラルメは『イジチュール』によって、「作者」ではなく「言語」という主体が作りだす空間を記述し始める。ユイスマンスはこういう布置の中に立ち現われた。都市が生みだした自然的・社会的紐帯からの無重力状態の中で、快楽は自律的に意味を生みだすようになり、「器官なき肉体」となってあらゆる刺激に反応する。引用の織物で作られた『さかしま』が開いてみせた世界はそのような世界だった。

しかしユイスマンスは転向する。本書で著者が取り上げる「皮膚」「閉鎖空間」「食べる」というテーマ群は転向の核心を衝く。「1848 年」の革命時に『人民の大義』を発刊したボードレールは「よろこばしき死」によって自分の屍を虫に食わらせ、他者に突き破られる皮膚に悦びを見出す。しかしユイスマンスは「解体する」皮膚に恐れを抱く。「私の境界を作るもの」に固執するのだ。

「私」は「私でないもの」を通してしか「私」を作りだすことはできない。私を映す鏡が、すでに事物ではなく、私と等身大の他者でもなく、断片的な姿しか映さない「資本」というひび割れた鏡となった時代に、自己のくっきりとした姿を映すために大文字の他者である「神」を密輸したのだ。何と私たちのいる現代と近いことか。

ユイスマニアとグノーシス

大野英土著『ユイスマンスとオカルティズム』に寄せて

● 蔵持不三也 (早稲田大学教員／文化人類学)

「信仰とは真実と思えるものではなく、われわれの理解で誤りと思えるものを信じることにある」。かつてヴォルテールは、その啓蒙思想の聖典ともいべき『哲学辞典』で「信仰」を取り上げ、こう述べている。ヴォルテール一流の諧謔といえそうなるが、おそらく彼は、この考えがラテン語の occultus「隠された」を語源とするオカルティズムと過不足なく通底していることに気づいていなかった。だからこそ彼は、同書でせっかく「オカルトの特性」の項を設けながら、魂を見たこともなく、それが何たるかすら知らない人間と自分の無知を、声高に叫ぶだけで能事足りてしている。「われわれの理解」が誤りなら、その理解が「誤り」と思えるものは「真実」になる。オカルティズムの本質とは畢竟まさにここにこそあるからだ。

エレウシスやイシスの密儀、オルフェウス教、ピュタゴラス主義、新プラトン主義などを背景とし、マニ教や、カバラ、さらには中世の薔薇騎士団や錬金術などへと分枝していった霊知の思想グノーシス主義が、秘教史の中核に座を占めることは疑いえないが、まさにそれは原初の世界に深淵と原父（プロパテル）を据え、アイオーンの流出が世界を創造していったと説く。そのダイナミズムをここで十全に語ることは不可能だが、ヴォルテール・パンドクスに引き寄せていえば、グノーシス主義はユダヤ＝キリスト教的な「理解」が排斥した「誤り」を反転させ、隠秘の知を体系化した。体系化して、その「理解」が説明しえない事象（たとえば原初の悪）を神話的に語る。

おそらくユイスマンスはこうした霊知への関心を小説という手法を用いて語った。たとえば、『さかしま』（湛澤龍彦訳）はすでに題名からしてグノーシス的であり、流出や幻視という概念もまたそうである。ユイスマンスはデ・ゼッサントが「グノーシス派に対する論争などには全く興味がなかった」（第 3 章）としているが——おそらく戦略的に——、彼の書斎の書架にはカバラ関連の書もあった。ありていにいえば、デ・ゼッサントとは自らの館、つまり作者の小宇宙（ユイスマニア）にあって、さかしま＝隠秘の世界をつくりあげる紛れもないヤルダバオート（デミウルゴス）ではなかったか。そしてそのユイスマニアを、大野英土はユイスマンスの多様な作品と背景に鋭利な視線を向けながら、カレイドスコープよろしくものの見事に描き出した。そこに私はもうひとりのヤルダバオートを見る。

状況雑感

小部屋と公園

■ ナニボウ (ミュージシャン) + 永田淳 (早稲田大学生協ブックセンター)

アンビエントと呼ばれている音楽がある。広義でそれは日常に埋没する背景や装飾を描くような音楽だろう。つくり手にとっては、突出した音をつくりだすのではなく、あるひとつの環境において自らに聴こえてくる音どもと、その時々々の心的状況を忠実に刻印しようとする音楽とも言えるかもしれない。私の耳にはそういう音は聴こえてこない、とか、そういう音の流れは一般的だが違和感を覚える自分がいるのは確かだ、などと自問する自分も含めてつくっていく音楽。そこで常につくり手が欲するのは、聴こえてくる音どもの「ありのまま」を描写することなのである。

だがこの「ありのまま」の音楽は、作曲という実践のなかで事後的に形成される環境とわがちがたく結びつく。このときアンビエント音楽はある時空間を積極的に定義しようとしているのであり、つくり手はそのことに気づきつつ戸惑い進むのかもしれない。すべてがノイズへと解体してしまうのではないか、という不安から逃れるためには、装飾が施されたこの居心地いい小部屋——「閉ざされた空間」に入らなければいけないのか、と。

2010 年 3 月より、渋谷区宮下公園に A.I.R. Miyashita Park (宮下公園アーティスト・イン・レジデンス) という「公園の創造」をめざした行動が継続している。6 月中旬、その一環で「公園の夜、静かな夜」というアンビエント音楽が奏でられるイベントがあった。夜に、「閉ざされた空間」の音楽が外／都市の音どもと混じり合う中で定義を拒絶するイメージが現れたように思えた。平面的な装飾を施された小部屋から、官能的な奥行きを持つイメージが溢れる都市の公園へ。都市の政治経済が開放を迫る中で、公園は別様の「閉ざされた空間」をつくるのだ。公園は閉じつけ、「ありのまま」という爆発のために潜勢力を高めている。

編集後記▶ 色恋沙汰の他愛ない歌芝居というまい。『コジ・ファン・トゥッテ』（ダ・ボンテ脚本）では「これなる磁石の霊驗、そこもと遠に証して進ぜん」と動物磁気て施療する場面がレシタチヴォで歌われる。療法の提唱者メスメルはモーツァルトの幼き日のパトロン。宮廷楽士に睨まれ上演不能に陥った神童に果敢にも自庭での上演機会を与えようとした、芸術の良き庇護者だ。ともにメイスンの団員といえは胡乱に思えるが、この時代すでに歴たる社交の場。にしても作曲家、件の場面で元パトロンのメスメル先生を顕彰したか茶化したか。ともかくも音楽はどこまでも軽やかで美しい▶ 転じてバリ。得て知れぬ療法など断固拒けたのはルイ 16 世。嫁いだアントワネットも、兄の啓蒙専制君主ヨゼフ 2 世も、かの音楽家と浅からぬ縁。旧体制に果たして「磁石」は如何なる効果をもったか。革命の火蓋切られる日も間近い▶ メスメルはのち詐欺師扱いされるが、S.ツヴァイクにいわせればモーツァルトオペラ生みの親だ。啓蒙思想と「オカルト」が微妙に絡み合いつつ事態は進行する。「オカルト」の効用——下って 19 世紀末、それと芸術の綾なす様を精密に捉えた本書。手練り寄せ紐解きつつ読む醍醐味の群をここに収めた。

(入江公康 武蔵野美術大学他教員／社会思想)